

Title	Old Mrs Chundle' 私論
Author(s)	植苗, 勝弘
Citation	Osaka Literary Review. 26 P.67-P.77
Issue Date	1987-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25503
DOI	10.18910/25503
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

‘Old Mrs Chundle’ 私論

植 苗 勝 弘

Thomas Hardy の短篇小説 ‘Old Mrs Chundle’ について3つのことを指摘したい。¹⁾ 第1点は、この短篇小説の出版事情とその後の取り扱いである。第2点は、この短篇小説と、長編小説 *Tess of the d’Urbervilles* との関係である。第3点は、この作品の技巧的側面についてである。

The Wessex Edition には収録されていなかったこの作品を The New Wessex Edition (以下 N. W. E. と略す) のなかに見つけて読んだという私の体験が本稿の出発点になる。私には興味深い好短篇と思われたが、Frank Pinion²⁾ を除いて誰もこの短篇に言及していないので不思議に思い、この作品の出版事情を調べたところ次の4点が明らかになった。^{2), 3)}

- ①この作品は1888年から1890年の間に書かれた。
- ②この作品は、Hardy の死んだ翌年の1929年に、すなわち書かれてから40年ほど経たのち、アメリカの Philadelphia で、当時の婦人雑誌 *Ladies’ Home Journal* の2月号に初めて掲載された。
- ③その原稿は、Hardy の第2夫人が亡くなる1937年まで Max Gate に保管され、それ以降は Dorset County Museum に移された。
- ④1977年に出版された N. W. E. の *The Stories of Thomas Hardy Volume Three* に収録されて、はじめて一般読者もこの作品が読めるようになった。

因みに、上記の事情と、Hardy の短篇小説全般に関わる著書の出版年代とを表にすると次のようになる。

- | | |
|-----------|--------------------------------------|
| 1888—1890 | ‘Old Mrs Chundle’ 執筆。 |
| 1889—1891 | <i>Tess of the d’Urbervilles</i> 執筆。 |
| 1929 | ‘Old Mrs Chundle’ 雑誌掲載。 |

- 1937 その原稿, Max Gate から Dorset County Museum へ。
 1949 Albert J. Guerard, *Thomas Hardy: The Novels and Stories* 出版。
 1954 Richard Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* 出版。
 Douglas Brown, *Thomas Hardy* 出版。
 1963 George Wing, *Thomas Hardy* 出版。
 1966 Irving Howe, *Thomas Hardy* 出版。
 1968 Frank Pinion, *A Hardy Companion* 出版。
 1977 *The Stories of Thomas Hardy Vol. 3* (N. W. E.) 出版。
 1982 Kristin Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy* 出版。
 1986 Harold Orel, *The Victorian Short Story: Development and Triumph of a Literary Genre* (Hardy の短篇小説に関する 1 章がある) 出版。

以上のことから次のような推測が可能である。

- ①1977年の N. W. E. に収録される以前に、一般の人々が 'Old Mrs Chundle' を読むことは、アメリカ以外の国においては困難であった。
 ②Purdy や Pinion はもちろん Dorset County Museum でこの作品の原稿を読んだであろうが、Hardy の短篇小説に比較的深い関心を寄せている批評家 A. Guerard, D. Brown, G. Wing, I. Howe たちは、
 ③この作品の存在を知らなかった。
 ④知っていても、入手することができなかった。
 ⑤読みはしたが、その著書のなかでとりあげるほどには感心しなかった。のいずれかであろう。
 ③少なくとも1977年(すなわち、この作品が N. W. E. に収録された年)以降に、Hardy の短篇小説に関する著書を出版した K. Brady や H. Orel といった人々(さきの年表参照)が、この 'Old Mrs Chundle' を読んでいない筈はない。にもかかわらず、この作品に一言もふれていないということは、それはそれで彼等のこの作品に対する評価を示すものであろう。

それでは前述の Pinion のこの作品に対する評価を次に示す。

... Sydney Cockerell, one of Hardy's executors, resisted its publication. He objected to its [i.e. the story's] humour,⁴⁾ but overlooked the transforming, if not shattering, power of its pent-up irony. The reverential note on which the story ends is Wordsworthian, but the technique whereby it is achieved is startling. It has the effect on the reader which was felt by the curate, and is said to have been felt by the wedding-guest when he heard the story of the Ancient Mariner :

He went like one that hath been stunned,
And is of sense forlorn :
A sadder and a wiser man,
He rose...

... The literary merit of this collection [i.e. N. W. E.'s collection of Hardy's stories] is variable but altogether far from negligible. Even in the least carefully prepared work, fascinating touches and situations are to be found. The stories rarely fail to hold one's attention, and one, 'Old Mrs Chundle', though not highly finished, must rank among Hardy's finest. In close juxtaposition it provides a wider range of responses than any other of his stories; and it is a reflection of the age in which he lived that, as far as is known, he made no effort to publish it.⁵⁾

このように彼が絶賛しているにもかかわらず、他の批評家が、この作品を全く無視しているのは極めて不可解なことである。

少し横道にそれるが、'Old Mrs Chundle' に関して興味深い事実を指摘しておきたい。この作品は前述のように Hardy の第2夫人の了解のもとに出版されたが、そのとき Hardy の遺言執行人の1人である Sir Sydney Cockerell が、その出版に反対したというのである。そして、その理由として Pinion は5の引用の第2番目の文章で 'He objected its humour' と述べている。Purdy の著書では、Cockerell の反対の理由が、'on account of the inferiority of the story' となっており、彼が作品全体の価値を否定していることになる。反対理由がこのようにくいちがっているのは困った

ことであるが、それはさておき、「Cockerell が、この作品のユーモアに異議を唱えた」というのはどういうことであろうか。問題のユーモアとは、おそらく Chundle 婆さんの吐く息が、‘sound tube’を伝わって昇ってきて、熱心に説教をしている副牧師を悩ます場面であると思われる。神聖であるべきはずの日曜の朝の教会のなかで、身分の低い田舎者の老女が演じるドタバタ喜劇、それに、極めて厳粛な内容の説教を冒瀆するような、副牧師の心の中での独りごと、さらに他人の吐く息で、その人が食べたものを当てようとする副牧師の行為などが、今世紀初頭のイギリス紳士である Sir Cockerell の顰蹙をかったのではないかと推察される。5の引用の最後の2行は、少なくとも当時においては、Cockerell 的な考え方が少数派ではなかったことを示すものであろう。しかし、それはあくまでも ‘a reflection of the age’ なのである。Victorian morality を離れてみれば、この ‘humour’ はお上品ではないにしても、2人の主人公の対比が鮮かで一級のユーモアである。それにこの ‘humour’ の表面的な当否の議論にかまけて、この ‘humour’ の裏にかくされた辛辣な irony を忘れてはならないのである。

第2点、この作品と *Tess of the d’Urbervilles* のテーマについて、その類似性を考えてみる。‘Old Mrs Chundle’ のテーマは、副牧師の自己欺瞞に満ちた言動を irony をこめて描いたところにある。⁶⁾ この副牧師は、自分には学問・教養があり、信仰心も厚く、神に任える身であるから Chundle 婆さんのように、身分が低く、信仰とも縁のない生活をしてきた人間を神の教えに導くのは自分の牧師としての勤め(‘ministration’)であるとする。彼のこうした思いこみと、彼が Chundle 婆さんに示すさまざまな態度との落差に、われわれは彼の自己欺瞞をみてとることができる。

彼は Chundle 婆さんが教会で説教を聴くことができるようにと、自分の財布をはたいて ‘ear trumpet’ を買ってやる。それが役立たないとわかると、‘sound tube’ なるものを教会に据えつけてやる。これは大成功で、Chundle 婆さんは生まれて初めて教会で説教を聴くことができるようになるのである。

るが、しかし、それと同時に、彼女が副牧師の説教のさいの大きな障害物となることがわかる。ついに耐えきれなくなった副牧師は、せっかく取り付けた 'sound tube' を彼女に断りもなしに取りはずし、あまつさえ「もう彼女には教会へ来ないように言いましょう」「約束はしたけれど、彼女を訪問するのはよします」と言う。ここに至って副牧師は、神に任える身でありながら、神に先だって Chundle 婆さんを裁き、我意 (self-will) を 'ministration' に優先させることによって、自己の中にある欺瞞を露呈してしまうのであるが、本人はそのことに未だ気がつかないでいる。そして、この牧師の蒙をひらくのが Chundle 婆さんなのであるが、前述のように彼女は学問・教養はおろか信仰とさえも縁のない一介の田舎の老女にすぎないというところに、この物語の副牧師およびキリスト教そのものに対する irony があると思われる。また Chundle という名前も象徴的である。Chundle という語の connotation として bundle, bulky, chunky なんかなく chunder (=to mutter, murmur; to grumble, find fault, complain) を考えるならば、Hardy が、この名前によって田舎に住む1人の obscure な人物を意味していることは明白である。同様に副牧師に名前が与えられていないのも当然であり、'the curate' でもって聖職者全体を意味する訳であり、Hardy の周到さがうかがわれるのである。

いっぽう *Tess of the d'Urbervilles* は、'Old Mrs Chundle' にくらべて、その plot ははるかに複雑であるし、種々の問題を内包しているから、これらの2つの作品を同じ土俵にのせることは不適切であろう。しかし Angel と Tess との悲劇の原因のひとつとして、'Old Mrs Chundle' の副牧師の自己欺瞞と軌を一にするような、Angel の自己欺瞞が考えられるのではないだろうか。

Angel は優れた知力と、因習にとらわれない自由な考え方を持ち、それゆえに教条主義に陥った当時の教会や旧態依然たる社会を批判し、学者になる素質をもちながら大学へは行かず、自分の理想を実現する道をひたすら模索する青年として登場する。それだけに Tess の告白をきいたとた

ん彼の示す変貌ぶりに、われわれは驚かされてしまう。女性のvirginityを至高の美德にかぞえる伝統的道德観、彼自身があれほど厳しく批判し、嫌悪していた因習的道德観のなかへ彼は閉じこもってしまうのである。

その夜、彼 [Angel Clare] がけなし非難している当の女性 [Tess] は、自分の夫のことをなんと立派で善良な人なのだろうと考えていた。しかし、2人のうえにはひとつの影がかかっていた。その影は Angel Clare が感じとっている影、すなわち自分は限りある身であることを示す影、それよりもいっそう暗い影であった。なにものにもとられない判断力を養おうと努力しているにもかかわらず、不意をつかれて、幼いころ受けた教えの世界にほうりこまれると、この進歩的かつ善意の青年、この25年間に生み出された典型的な人間もやはり因襲の奴隷であったのだ。予言者は彼に告げなかったし、彼自身もそれを予言するだけの能力はなかったが、本質的にこの若い妻は悪を憎むことではどんな女性にも負けず、Lemuel 王の称賛を受けてしかるべき女性であったのだ。彼女の道徳的価値は、彼女がしたことによってではなく、しようとしたことによって計られねばならない。そのうえ、こんなとき近くにいる人は、その欠点が紛れることなく現れでるから損をする。かたやはるか遠くにいる人ならば、その距離のおかげで欠点が趣きのある美点とうつるので敬われたりする。彼は、Tess にとって本質的でないものに目がいって、Tess の本質を 見落し、不完全なものが完全なものに勝る場合だってあるということを 忘れていた のだ。(第39章) (下線筆者)

ここで Hardy は Angel を糾弾している。高度な知性とくもりのない良心を持つ Angel が、その信条・良心に反して Tess の本質を 見落し、彼女をその意図したことで評価すべきだということを 忘れていた のだ。それは副牧師の Chundle 婆さんに対する態度と軌を一にしている。すなわち Hardy の糾弾の鋒先は Angel の自己欺瞞に向けられているのである。さてブラジルから帰国した Angel は、Tess が貧困と、自分の家の不幸とに苦しみながら、彼の両親の助けを求めるときもせず、独立不羈の人間として、毅然たる態度を失うまいと必死の努力を続け、ついに進退極まって、再び Alec の手におちてしまったことを知る。このとき彼は、「ああ、ぼくが間

違っていた。』(‘Ah-it is my fault.’)(第55章)と叫び、初めて自己の欺瞞をはっきり認識するのである。しかし、この認識は、Tess を永遠に失うという高い代価を払って、はじめて得られたわけで、これがこの物語の irony なのである。

‘Old Mrs Chundle’の irony の対象は、聖職者およびキリスト教そのものであり、*Tess of the d’Urbervilles* のそれは、当時の進歩的思想をもった青年であるから、その批判の対象は異なるが、主人公の自己欺瞞が暴かれるという点が共通している。しかもその暴かれかたが直接的・攻撃的でないところも共通している。すなわち前者の場合は、キリスト教を知らずしてキリスト教精神を体得している Chundle という人物、後者の場合は、学問教養・宗教に依らずして真実の愛を直観している Tess という人物を通して、それぞれの相手の自己欺瞞が暴かれていく、という手順も共通しているのである。

このように考えてくると、‘Old Mrs Chundle’の執筆が1888年から1890年の間であり、*Tess of the d’Urbervilles* のほうは1889年から1891年と、この2作がほとんど同じ時期に書かれているのも興味深いことである。

第3点、‘Old Mrs Chundle’の技巧的側面について。まず、最初にこの物語の ending を示す。

The curate went out, like Peter at the cock-crow. He was a meeek young man, and as he went his eyes were wet. When he reached a lonely place in the lane he stood still thinking, and kneeling down in the dust of the road rested his elbow in one hand and covered his face with the other.

Thus he remained some minutes or so, a black shape on the hot white of the sunned trackway; till he rose, brushed the knees of his trousers, and walked on. (下線筆者)

(訳) 副牧師は、にわとりが鳴いたときの Peter に似た様子で家を出た。彼は我意を捨てた青年となっていた。歩きながら泣いていた。道の人気のない所へ来て彼はじっと立ちどまり物思いに沈んだ。やがて道の土埃

のなかに膝を折り、片方の手で他方の手の腕を支え、腕を支えられた手でもって顔を覆った。

そのまましばらくじっとしていた。副牧師の黒い姿が、白熱の道に浮いてみえた。やがて彼は立ちあがり、膝のほこりを払い、歩いていった。

これは、Hardyの短篇小説のなかでも、例外的に visual で絵画的な ending である。⁷⁾さらに引用下線部に注目するならば、人間的弱さを思い知らされた、すなわち自己欺瞞に気付かされた副牧師の傷心ぶりが、キリストを3度否認したときの Peter に譬えられており、宗教的雰囲気意図的に盛りこまれていることがわかる。因みにこれに関連する聖書の記述は下記のとおりである。

61 And the Lord turned, and looked upon Peter. And Peter remembered the word of the Lord, how he had said unto him, Before the cock crow, thou shalt deny me thrice.

62 And Peter went out, and wept bitterly.

St. Luke 22 (A. V.) (下線筆者)

次に、この ending の最後の文章が 'walked on.' で終わっていることに注目したい。これがもし 'walked back to the church.' となっておれば、注7に掲げた Hardy の他の短篇小説の ending に近くなる。すなわち副牧師が教会へ戻って、この話はこれで完結という。いわゆる closed ending になる。ところが 'walked on.' であれば、これから副牧師がどこへ行くのか分からない。実際問題として、副牧師は教会に帰るしかないのであるが、そこがわざとぼかしてある。いわゆる open ending である。すなわち、Hardy はこの物語に最終的な結末を与えていないのである。われわれは、'walked on.' のあとに、たとえば 'to find any salvation' といった句を想像しないだろうか。'walked on.' のほうが、副牧師の傷心ぶりがはるかに効果的に表現されている。しかし、この ending の宗教的印象が強ければ強いほど、また副牧師が悲痛にみえればみえるほど、聖職者およびキリスト教に対する Hardy の irony は強烈になるわけで、その意味では実に見

事な ending であるということができる。

最後に、この物語の 'humour' についてはすでに少しふれたが、この 'humour' がこの作品のテーマにたいして果す comic relief 的役割を見逃してはならない。

まず副牧師とは対照的に扱われている Chundle 婆さんの描写に注目したい。彼女は副牧師に対しても遠慮会釈のない口のききかたをするし、嘘がばれても空とぼける図々しさも持っている。そして、その彼女が教会のなかで、'sound tube' を相手に悪戦苦闘する様子は実に滑稽で、ユーモア小説を読まされている思いがする。しかし、このような粗野な外面とはうらはらに、彼女は、ついにはこの副牧師に全幅の信頼と愛情とをよせる人間へと変身するのである。しかし、このことを Hardy はもちろん最後まで読者に明かさず、これが、この作品の punch line になっている。また Chundle 婆さんが悪戦苦闘するこの場面には副牧師も登場する。口では難解にして、術学的な説教をしながら、鼻と頭とでは 'sound tube' からたちのぼる Chundle 婆さんの息から、彼女が昨夜たべた料理を推理している。すなわち教会内でのこの場面では、いわば相容れない聖と俗とが奇妙な、しかもイロニカルな形で並べられており、それが読者の笑いを誘うのである。このようにテーマも ending もシリアスで、一歩間違えれば陰気くさい寓話になりかねない内容でありながら、一読短篇小説の醍醐味を満喫する思いがするのは、Hardy がユーモアをこの作品に巧みにとりいれているからに他ならない。

以上、みてきたように、'Old Mrs Chundle' はわずか数頁の短篇ながら内容・技巧両面において、Hardy の美質がはっきり現れており、もっと重要視されてもよい作品であると思われる。

注

- 1) 本稿は、日本ハーディ協会第29回大会（昭和61年10月18日、於帝塚山学院大学）で、「'Old Mrs Chundle' 私見」と題して口頭発表したものを骨子としている。

- 2) Frank B. Pinion, *A Hardy Companion: A Guide to the Works of Thomas Hardy and their Background* (Macmillan, 1968), p. 85.
- 3) Richard L. Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (Oxford, 1954), p. 268.
- 4) Sydney Cockerell とこの作品については、すぐ後述する。
- 5) Preface to *The Stories of Thomas Hardy Vol. 3* (N. W. E.)
- 6) 自己欺瞞という言葉については、「日本国語大辞典」(小学館, 昭和51年)の定義「自分で、自分の心をだますこと。自分の信条や良心にそむいたことを無意識に行なう場合にも、意識しながら強いて行なう場合にも言う。」を採用する。
- 7) Hardy の代表的な短篇小説の ending のいくつかを示す。

Their graves were dug at the back of the little church, near the wall. There is no memorial to mark the spot, but Phillis pointed it out to me. While she lived she used to keep their mounds neat; but now they are overgrown with nettles, and sunk nearly flat. The older villagers, however, who know of the episode from their parents, still recollect the place where the soldier lie. Philis lies near. ('The Melancholy Hussar')

That Carry and her father had emigrated to America was the general opinion; Mop, no doubt, finding the girl a highly desirable companion when he had trained her to keep him by her earnings as a dancer. There, for that matter, they may be performing in some capacity now, though he must be an old scamp verging on three score-and-ten, and she a woman of four-and-forty. ('The Fiddler of the Reels')

Some four years after xxxx this date a middle-aged man was standing at the door of the largest fruiterer's shop in Aldbrickham. He was the proprietor, but to-day, instead of his usual business attire, he wore a neat suit of black; and his window was partly shuttered. From the railway-station a funeral procession was seen approaching: it passed his door and went out of the town towards the village of Gaymead. The man, whose eyes were wet, held his hat in his hand as the vehicles moved by; while from the mourning coach a young smooth-shaven priest in a high waistcoat looked black as a cloud at the shopkeeper standing there. ('The Son's Veto')

The grass has long been green on the graves of Shepherd Fennel and his frugal wife; the guests who made up the christening party have mainly followed their entertainers to the tomb; the baby in whose honour

they all had met is a matron in the sere and yellow leaf. But the arrival of the three strangers at the shepherd's that night, and the details connected therewith, is a story as well known as ever in the country about Higher Crowstairs. ('The Three Strangers')

For some time she could not be found; but eventually she reappeared in her old parish, —absolutely refusing, however, to have anything to do with the provision made for her. Her monotonous milking at the dairy was resumed, and followed for many long years, till her form became bent, and her once abundant dark hair white and worn away at the forehead—perhaps by long pressure against the cows. Here, sometimes, those who knew her experiences would stand and observe her, and wonder what sombre thoughts were beating inside that impassive, wrinkled brow, to the rhythm of the alternating milk-streams. ('The Withered Arm')